

# ルパン誕生前のルブラン

## ——スピードの魅惑——

坂 本 浩 也

幼なじみの赤い車に揺られて、ほぼ二十年ぶりに小学校を訪れた。寒空の下、驚くほどちっぽけに見えたのは図書館である。鍵のかかったガラス戸に手をかざして瞳を凝らせば、ぼんやり浮かび上がる背表紙のタイトルと読書の日々。「ルパンが好きでよく読んでたよね」。同級生の記憶は、つねに正しい。

誰もがルパンを愛していた？ ここまでいうと陳腐な誇張か下手なパロディにしか聞こえない。けれど、あの頃は巨大に思えたこの図書館に、怪盗紳士は間違ひなく偉大なヒーローとして君臨していたのだった。

「斧は回転し、大気は揺れ動き、翼は開く」

ティベルメニル城のこの暗号は、アルファベット一文字一文字の発音が、同時にひとつの意味を持つ言葉（斧

hache = H, 大気 air = R, 翼 aile = L) でありうるという想像もしていなかった魅力的な発見をもたらした。この暗号を最初の合い言葉として、フランス語フランス文学の世界に足を踏み入れた（踏み外した？）のは、わたしだけだろうか。

無数のおさらい読者をふくむ「大衆」の英雄ルパン。たしかに「三世」の存在感はあまりに大きく、文学部の学生ですらオリジナルを知らないことがある。だからといって、一九〇五年七月の『ジュ・セ・トゥー』誌に、いきなり「逮捕」される大盗賊として華々しく登場したアルセーヌ・ルパンが、大衆文化の表舞台から消え去るはずがない。二〇〇四年には、ロマン・デュリスの姿を借りて銀幕に復活書店をのぞくと、南洋一郎のルパン全集がポプラ文庫で復

刊され、ハヤカワ文庫からは新訳が刊行されている。帰ってきたルパン。不滅のルパン。グーグルで検索するだけで、膨大な量の情報が収集可能だ。見出されたルパン？ もはや彼について語られていないことを探すほうが難しいかもしれない。

もし知られざるルパンの肖像を描くのが無理ならば、ルパン誕生前のモリス・ルブランについて語ってみてはどうか。この作家の初期作品は今やすっかり忘れ去られているけれど、もしかすると怪盗紳士の冒険譚を先取りするような場面が見つかるのではないか。そんな期待をこめて、ここでとりあげてみたいのは、当時の新発明「自動車」、キーワードは「スピード」である。

### ベル・エポックの自動車

山田登世子が『リゾート世紀末』で指摘しているとおり、「スポーツマン」ルパンは「希代の自動車マニア」である。スピードへの情熱は、彼の人生哲学にまで浸透している。決定的な宣言を引用することから始めよう。『ルパン対ホームズ』のなかの怪盗の台詞だ。

「大事なものはこれなんだ、解るか、危険だよ！ 絶

えず危険を感じ続けることだ！ 危険を空気のように呼吸し、自分の身边に吹きまくる、吠え立てる、罌を張っている、切迫している、危険を感じながら……しかも嵐の真只中であつてびくとも動ぜずに落ちていくことだ！……さもなければ破滅あるのみという、この切迫感……。これに比較しうる感銘は、ただ一つ自動車競走の運転手のスリルあるのみだ！ だが自動車競走は、一日だけが、僕の競走は生涯続くのだ！」

（堀口大學訳、新潮文庫）

ルパンにとって、人生とは終わりのなきカーレースなのだ。ここで文学史をおさらいすると、「ル・フィガロ」紙の一面にイタリアの前衛詩人マリネットイの「未来派創立宣言」が発表されたのが一九〇九年二月二〇日。世界は「速度の美」によって豊かになった。爆音をあげるレーシングカーはサモトラケのニケ像よりも美しい、と言つてのけた有名なマニフェストである。ところで『ルパン対ホームズ』の出版は一九〇八年。ルブランは未来派と同じ時代の空気を吸い、未来派宣言に先駆けて「速度の美」を追い求めていたことになる。

さらに時間を遡れば、ルブランの先駆性をはつきりと見

えてくる。一九〇七年十一月。パリで記念すべき第十回モーターショーが開催されていた頃のこと。ある雑誌が作家・芸術家を対象に、自動車をめぐるアンケートを実施した。最も重要な回答者は『責苦の庭』で知られるオクターヴ・ミルボーだろう。愛車のナンバープレートを題にした自動車旅行記『六二八・E八』を刊行したばかりだったからだ。しかし、われわれの注意をひくのはルブランの回答である。じつは彼は『ルート』（自動車 l'automobile の略称 l'auto）というタイトルのスポーツ新聞に（とはいえ現代日本のそれとは趣が異なるが）、すでに多くの短篇を発表していた。そうやって「自動車乗りとしての自分の感覚を百五十回にわたって描写し、多くのドライバーに非業の死を遂げさせていた。その数は百五十人……あるいはそれ以上」。いいかえるなら、ルブランにとつての自動車とは、「すばらしい文学的主題であり、物語に悲劇的な決着をつけるための驚異的な手段」だったのである。

確認しておこう。十九世紀末、モリス・ルブランは同郷の先輩であるフローベルやモーパッサンの衣鉢を継ぐことを目指し、いわゆる純文学作家としてデビューした。しかし期待していたほどの成功は得られず、世紀の変わり目、新しい「レジャースポーツ」をめぐる風俗を中心的な

題材に選ぶことにより、大衆小説の分野へと次第に接近してゆく。

一八九八年に発表した中篇『これが翼だ！』は、ノルマンディーを舞台にしたサイクリング恋愛小説である。自動車旅行をきっかけにして、有閑階級の若い二組の夫婦のパートナーが入れ替わる。というと姦通小説の現代版にすぎないのかと思いきや、焦点はむしろ、女性賛美と自転車賛美が重ね合わされるところにある。邦訳こそないものの、近年フランスで再刊され、山田登世子やステイヴン・カーンの文化史研究に言及があるため、その内容を知ることが難しくない（本稿末尾の文献一覧を参照していただきたい）。

自転車に続き、ルブランが自動車に注目したのは当然の流れだった。一九〇二年から『ルート』をおもな発表媒体として発表された（百五十ではなく）約三十篇の物語は、一九〇四年、『赤い顎、八十馬力』と題する一冊にまとめられた。しばしばコントと呼んでもよい短さであり、すべてが自動車をメインテーマとしているわけではない。この著作は、邦訳はおろか再刊すらされていないため、古本市場でも図書館でも見かけない幻の書物である。博士論文を準備していた頃、わたしはフランス国立図書館所蔵のマイクロフィッシュで読んだのだが、最近ネット経由で現物を

入手できた。この機にあらためて日本の読者向けに紹介してみたい。

明らかにルパン・シリーズへとつながる要素を含むのは、ずばり「紳士」と題する短篇だ（初出は一九〇三年六月）。語り手「私」は、パリールアーヴル間の汽車で知り合ったメチエルスキー公爵と名乗る紳士に二十四馬力の自動車を買いたいと持ちかける。もっとスピードの出る新車に買いたいから、というのは表向きの理由で、本当は莫大な借金を抱えて困っていたのだ。紳士は興味を示すが、機械に疎いふりをして「私」をあきれさせ、油断させておいてから運転席に乗り込み、無理解をよそおって訊ねる。「さて、発進は、こうして、こうすればよいのでしたかな？——まづこうして、こうするんですよ、と私は答えた。彼はまづこうして、こうした。車は動き出し、巧みにカーブを曲がった。ベテラン運転手の腕前は一目瞭然だった。車は全速力で逃げ去り、私は呆然と立ちすくむしかなかった。」紳士は自動車泥棒だった。欺こうとしていた側が欺かれる。見事な語り＝騙りである。

それ以外の作品を見ると、アンケートの回答どおり、自動車が変死の小道具として用いられているケースがいくつも挙げられる。

「ドライブ」という短篇は、いかにも良妻賢母らしい若く美しい婦人から路上で声をかけられ、一度でいいから自動車に乗ってみたい、恐ろしいほどのスピードで飛ばしてほしい、と頼まれた体験を語ったものだ。走行中はけつして言葉を交わさないという、まるで冥府下りの神話を思わせるような約束をかわした車のなかで、名も知らぬ婦人は速度に酔いしれる。しかしふたりは事故に遭遇。彼女は命を落とし、「私」は事故を隠蔽する。じつにあっけない話だが、女性、速度、死という、ほかの短篇でも反復される三点セットの不気味な魅惑が凝縮された一篇である。

「わが許嫁」は、熱狂的な自動車マニアである友人の告白を書きとめたという設定だ。三年ぶりに再会した友人はなぜかすっかり白髪になっている。それは、人里離れた山奥をドライブしている途中、事故でフィアンセを亡くし、その遺体を座席に縛りつけて目的地まで旅したという恐ろしい体験のせいだった。ぶらんぶらんがくんと揺れる遺体の頭、ほどけて不気味になびき、首にからみついてくる髪。凄まじい恐怖によって白髪になるというモチーフは、ポーの「大渦巻に吞まれて」から乱歩の『孤島の鬼』へと引き継がれるものだが、ルブランの世界では、自分が殺した恋人の遺体とのドライブという体験がトラウマの要

因となっているのが印象深い。

## 殺人、あるいは凶器という名の自動車

この二篇では、自動車はあくまで意図せざる交通事故の原因にすぎないが、意図的な殺人のための凶器として用いられる場合もある。「曲がり角」という作品では、貴族の当主が妻の不貞をかぎつけ、その妻を乗せた車で不義の子ども（乳児）をひき殺すという残忍な犯罪が描かれる。身重の妻を乗せ、何度も同じ曲がり角を急速で曲がるという予行演習を繰り返し、出産をへて犯行の日が来る。問題の曲がり角で何かをひいたあと、「たぶん子どもだったな……、あなたの息子かもしれない……」とつぶやく男の頬に、残忍な、憎しみに満ちた笑みが浮かぶ。まったく同じような自動車による復讐殺人というモチーフが、短篇集の表題作でさらに発展的に扱われているので、詳しく見ていくことにしよう。

連作短篇「赤い顎、八十馬力」は三つのエピソードで構成されている。主人公は、偏狭で醜い老侯爵、いやむしろ彼の愛車、「彼と同じように怪物的な、凄まじい、桁外れの」車である。「細長く、右側がややへこみ、一人乗りの座席がとても後方におかれているため、片目のごとき不気

味な雰囲気をもっていた」。老侯爵は若妻の浮気を疑い、暴力をふるい、息も絶え絶えの妻を車にじかに「まるでトロフィーのように」縛りつけ、妻と駆け落ちの約束をしている愛人をひき殺しに向かう。

人物設定は類型的で、物語にはリアリティが欠けている、というなかれ。問題はむしろ、自動車という装置が運転手の怪物性を反映・増幅する役割をになうということ（八十馬力という数字は、当時としては破格であり、フィクション特有の誇張である）。またそれによって、性的な欲望（エロス）が死の衝動（タナトス）と結びついた妄想（ファンタズム）の世界が繰り広げられているということだ。

運転手はほとんど愛車と一体化し、第二話では、交通事故に偽装された連続殺人の、謎めいた犯人として登場する。鮮血の色の車を駆る殺人鬼は「野獣」に喩えられ、「赤い顎」というあだ名で呼ばれる（原題 *Gueule-rouge* の *gueule* とは獣の口を指す言葉である）。表紙のイラスト（口絵に収録）をご覧ください。大衆小説に登場する伝説的な悪役というのはいそいそいうものだろうが、この奇形的な殺人者ならぬ殺人「車」の脅威も、噂によって国中に広まり、神出鬼没の存在として恐れられる。「混乱した人びとの脳裏に浮かんだのは、野蛮な征服者の姿、

陶醉し、狂気に駆られたアッチラ大王、神の鞭の幻影であった！……」

最後の第三話の舞台は、自動車フェスティバルの会場である。お約束どおり、陽気なお祭り気分が「赤い顎」の登場によって恐怖のどん底にたたき落とされる。狂える暴走車は最初、「はつきり」としない何かとだけ形容される。いわば未確認走行物体の登場を皮切りに、ルブランの叙述は悪夢のような非現実性を帯び、避けられない悲劇の接近を読者に感じさせる。この「何か」は「自律した」存在であり、理性の統御には従わない。なにしろ、狂気と機械との不幸な結合によって生まれた「原始的な力」によって突き動かされているのだから。つまりルブランの描写する自動車は、たんなる破壊のための凶器ではなく、むしろ殺人の狂気の増幅装置なのだ（同じ短篇集に収録されている「黄金の断崖にて」では、狂気に侵された公女が猛スピードで車を運転する様子が描かれる）。殺人といってもそれはしばしば自殺と紙一重だ。じっさい、この物語は怪物侯爵の死によって幕を閉じることになる。

このように、劇的な演出の小道具としての自動車は、かなりの初期から、三面記事に近い犯罪小説や推理小説というジャンルに不可欠の要素となった。最初、自動車は人び

との噂の的として登場する。話題にはなるが、じっさいに見た人はいない。自動車がセンセーションを巻き起こすのは、新発明であり、当時まだ数も少なく、強力な破壊性を秘めた機械、つまり一般人には仕組みが理解できないものだったからだ。とりわけ、自動車にふさわしい交通網、標識や交通ルールを含めた広い意味での「技術システム」の整備が不完全だったこの時代——すなわち自動車の歴史の最初の四半世紀（一八九五年～一九二〇年）——にあつては、「ドライバーとはアウトローである」という考え方は珍しくなかった。自動車による犯罪という文学的な主題の扱い方もまた、自動車という新発明をめぐる集合的な想像力（当時のフランス社会の人びとが共有していたイメージ）と無縁ではない。文学は、そうした社会的な表象を強化あるいは拒絶し、正当化あるいは批判する。場合によっては、ずらしたり変形したりもする。

「赤い顎、八十馬力」というフィクションは、自動車による殺人を断罪しているわけではない。ルブランのこの物語は、むしろ最終的には読者が殺人鬼に同情し、感情移入できるようなかたちで組み立てられている。機械が体現する非人間的な破壊の魔力に憑かれた老侯爵の罪は、最後にあがなわれる。きわめてメロドラマ的な終幕であるが、こ

の怪物じみた老人は、みずから命を奪った妻の名前をつぶやきながら死んでいくのである。

ありふれた悲劇的な愛の物語として終わりを告げるこの連作短篇では、自動車の役割は決定的というよりも補助的であり、主人公の怪物性を増幅する分身にすぎないが、ルブランは最後まで、機械の放つアンビヴァレントな魅惑を維持し、読者に共有させようとする。凡庸といえは凡庸な、愛（欲望）が破壊（殺人）と等号と結ばれるような世界を、自動車は弾丸のように正確に、悲劇的結末へと非人間的に導いていく。ついでにいうと、この弾丸のメタファーは、当時の紋切り型の一つである。まさに人間の意志と理性を超え、正確に悲劇のプログラムを実現するところに、大衆向けフィクションにおける自動車の意義があるのだ。

ルブラン以降、物語に悲劇的な結末を導入するための小道具として自動車を使うことは定番化した。ひとつだけ当時の例をあげよう。小説『失われた時を求めて』の作者ブルーストにモーリス・デュプレールという友人がいて、一九〇七年に『狂乱』という作品を書いている。主人公プレヴァンは老齢の有名な学者だが、恋に破れ、絶望的な嫉妬に苛まれ、五十馬力の愛車を「自殺の道具、とても便利な慰めの道具」として用いることを決める。ラストシーン、彼は

かつての愛人イヴォンヌと友人たちを道連れに、わざと崖から転落し、車は「首長竜」のように水中に消える……。

同じようなシーンが、二〇世紀を通じて、さらには二一世紀の今日に至るまで、ページのうえで、あるいはスクリーンのうえで、いったい何度繰り返されてきただろうか。

### 誘拐、あるいは速度という名の牢獄

自動車が可能にする暴力は、残忍な殺人、あるいは絶望的な自殺だけではない。「自動車が誘拐の流行を復活させたことには疑いの余地はない」。これは、ルブランの同時代人で、彼とおなじように自然主義に近いところから作家としてのキャリアをはじめ、自動車を愛好し、ユーモアあふれる小話を数多く発表したアンリ・キストマークルスというベルギー出身の小説家の言葉である。

ルブランの短篇集にも、誘拐を題材とした物語がいくつか収録されているが、そのつど演出の仕方が異なっていて、比較してみると面白い。「魔法にかけられて」という短篇をとりあげよう。結婚してまもないシユザンヌが親友に告白するという形式である。彼女は、夫が財布を忘れてとりに帰っているあいだに、見知らぬ男性に無理矢理ドライブに連れて行かれる。自動車の「あの騒音、あの空間のなか

にいと、まるで夢の牢獄に閉じ込められたみたい。牢獄は果てしなく広がって、そこから逃げ出すことはできないの……」。速度は夢幻的・非物質的な檻を創りだす。「わたしのまわりには敏捷な番人がいて、真空の環のなかにわたしを閉じ込める。この環を飛び越えるのは壁を乗り越えるよりも難しい。その番人とはスピード。スピードは駆ける。無秩序で、論理的じゃない、すばらしいスピード。」

ここに読まれるのは、自動車と誘拐にたいする何とも奇妙な賛辞である。こうして最終的に、誘拐という犯罪は正当化されてしまう。なにしろ被害者自身がスピードの「魔法」と大胆なドライバー（紳士的な青年）の魅力に降参し、恋に落ちてしまうからだ。シユザンヌは、こんなふうにより自動車による新生の感覚を讀えてみせる。

「とつぜんこんな気がした。ありとあらゆる感覚が混じり合って一つになってしまう。広大で複雑な感覚、その感覚を通して、わたしのなかに、まるで差し出された瓶に注がれるみたいに、すべてが飛び込んでくる。光り輝くすべてのもの、香りを放つすべてのもの、調和のとれたすべてのもの、この世界の美しさのすべて、優雅さのすべて、清々しさのすべてが。」

速度への熱狂は、どんどんエスカレートする。

「奇妙な世界に入りこんだような気がした。起きるごとすべて、これまでとは違ってる。別の人生、不思議な、これまで体験したことのない人生を生きてる。「中略」気がふれてしまいそうな未知の感覚。「中略」過去は死んだ。あるのはただ魅力的で不可思議な未来だけ。」

じつをいうと、ルブランが速度体験の熱狂を描写するのはこれが初めてではない。先に紹介したサイクリング小説『これが翼だ！』のなかにも似たような表現が見られる。未体験のスピードがもたらす自然との完全な融合の感覚、調和に満たされた忘我の境地は、同じスピードを共有するパートナー（ここでは誘拐犯）とのトータルな一体感の表現でもある。機械の速度によって、現代人は、汎神論的な自然とも無意識的な性のエネルギーとも幸福な関係を結びなおす。「超人的な不可能な欲望、わたしの生命が百倍に沸騰してる！」と、誘拐の被害者はわれを忘れて絶叫する。はつきりいつてルブランは、自動車好きの男性読者の快樂原則に若妻というキャラクターを従属させている。速度の力で女性を支配する、しかも女性のほうからなびいてく



るようにさせること。書いていて恥ずかしくなるほど「魔法にかけられて」というのはスピード狂の妄想を満足させる都合のいいお話なのだが、別の短篇で誘拐の失敗を描いていることも確認しておかないとフェアではあるまい。

タイトルは「手なずけられないもの」。銀行家の令嬢ディアーヌに片思いしている青年貴族が誘拐という手段に訴える。スピードの牢獄というモチーフがここでも繰り返される。「彼はまるでもつとディアーヌを閉じ込めようとするかのように、速度をあげた。そして何分も、何分も過ぎた。いろいろなもの、いろいろなもの二人のかたわらを流れて去った。まるで船の舳先に分けられる波のように。」

自動車は海上の船のように孤立している。しかし、空間を死の脅威によって閉鎖するのは、水（窒息の原因）ではなく速度（破壊の原因）である。速度に陶醉したシユザンヌと対照的に、速度に無関心なディアーヌは、相手の思いのままになるくらいなら、死ぬ覚悟でハンドルを奪って事故を起こしてしまえ、という危険な意志をみなぎらせ、それを読みとった哀れな誘拐犯は怖じ気づいて彼女を解放する。さすがのルブランも、男性読者の欲望をくすぐるおとぎ話ばかり書いているわけではない。

幸福な誘拐、不幸な誘拐。まるですべての可能性を試そ

うとするかのように、ルブランは「クリスマスイヴ」という短篇で、誘拐のパターンを二重に反転させてしまう。男性が女性を誘拐するのではなく、その逆にする。しかも、誘拐されるのではなく、誘拐してもらう。これだけでは訳がわからないだろうが、ストーリーは単純。物語の語り手である男性が、教会のミサでちらりと見かけただけの謎めいた婦人に恋をする。女性はじぶんで車を運転してきていた。モダンな美女のイメージに心を奪われた男性は、この自動車で彼自身を誘拐させる（誘拐してもらう）ための策略を練る。クリスマスの晩、彼はこの女性の整備士に変装し、入れ替わる（当時は事故が頻発したので、車の所有者が運転できる場合でも、整備士が同乗することが多かった）。そして彼女の知らないうちに、彼女の運転する車に乗って、彼女の住まいまで連れて行ってもらうとしたのだ。

みずからの意志でスピードの牢獄に囚われようという受動的な誘拐。なかなかのアイデアだが、相手の女性は一枚上手だった。到着した先は立派な城館。油断していた男性はガレージにそのまま閉じ込められてしまう。自動車という牢獄を甘く見てはいけない。女性はいれ替わりに気づいていたのである。男性は絶望に襲われるが、凍えるような寒さのなか一時間ほど経ったところに召使いが現れ、侯爵夫

人が夜食に招待すると告げる。しかし、そこには予想もできない結末が待っていた。彼の恋した相手は、すでに孫のいるような女性だった……。

### ルパンの車に乗って

殺人と誘拐。ルパンの生みの親ルブランは、犯罪小説の二つのテーマを展開するうえで、自動車という新たな小道具を巧みに活用した最初の小説家の一人だった。

心理的な緊張を加速度的に増大させる「動く牢獄」としての自動車。サスペンスの必需品としての自動車。死を招く自動車。しかし、それだけがすべてではない。短篇「魔法にかけられて」に見られるとおり、自動車とは奇妙な愛の引力が作用する親密空間でもあるのだ。

ここで締めくくりとして、傑作『奇岩城』のある場面を抜き出してみたい。「空洞の針」の謎をめぐり勝負を挑んできた高校生探偵ポートルレに対し、ルパンは見事な変装で格の違いを見せつける。そして陽気な雄弁の力をかりて、ポートルレを自動車に連れ込み、時速百キロを超える猛スピードで走らせる。しかし意外なことに、無敵の怪盗は、将棋の感想戦よろしく先ほどの対決を振り返っているうちに、魅了される少年の目の前で、無防備に眠り込んでしま

う。

「車は地平線めがけ、飛ぶように走っていく。それに合わせて地平線も、どんどんと後退していった。もう町も村も野原も森もない。あるのはただ、猛スピードのなかに飲み込まれていく空間だけだった。ポートルレは脇にすわる男の顔を、いつまでも興味深そうに眺めていた。できることならこの仮面越しに、隠れた素顔を見とりたい。そしてポートルレは思った。いったいどんななりゆきでこの男と、仲よく車に乗り込んだりしているのだろうか?」

(平岡敦訳、ハヤカワ文庫)

ポートルレはルパンの愛読者代表としてこのリムジンに同乗している。わけもわからぬまま、強引にルパンの車で連れ去られること。狭い車内に閉じ込められて、心地よい敗北感に身を委ねながら、ルパンの言葉に耳を傾け、ルパンの横顔を眺めること。読者にとって、これにまさる欲びがあるだろうか。ルブランはスピードの檻の魅惑を熟知していた。彼の残した傑作小説は、ルパンの隣に読者を乗せて走り続ける、幸福な愛の自動車なのである。

【関連文献】

- «L' "Auto" et les artistes», *Les Annales politiques et littéraires*, n° 1274, 24 novembre 1907, p.491-493.
- Derouard, Jacques, *Maurice Leblanc. Arsène Lupin malgré lui*, 2<sup>e</sup> éd. revue et corrigée, Segnier, 2001.
- Duplay, Maurice, *Le Délire*, F. Tassel, 1907.
- Kisteneckers, Henry, *Monsieur Dapont chauffeur. Nouveau roman comique de l'automobilisme*, Fasquelle, 1908.
- Leblanc, Maurice, *Gueule-rouge 80 chevaux*, Ollendorff, 1904 («Gueule-rouge 80 chevaux», p.3-19; «L'Enchantement», p.23-32; «Une promenade», p.35-39; «Ma fiancée», p.61-66; «Un gentleman», p.69-73; «Sur la corniche d'or», p.95-101; «Le tournant», p.161-165; «L'Indomptable», p.205-210; «Un réveillon», p.275-281).  
——, *Voici des ailes*, Phébus, 1999.
- Sakamoto, Hiroya, «La genèse des "littératures automobiles": histoire d'une polémique en 1907 et au-delà», *La Voix du regard. Revue littéraire sur les arts de l'image*, n° 19, 2006, p.31-42.  
<http://www.voixduregard.org/voiture.htm>
- カーン・ステイヴン『時間の文化史』浅野敏夫訳、法政大学出版局、一九九三年
- 同『空間の文化史』浅野敏夫・久郷丈夫訳、法政大学出版局、一九九三年
- 坂本浩也「自転車をめぐるフィクション——十九世紀末フランスに

おける速度の詩学と性差のイデオロギー」、『ヨーロッパ研究』東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター、第三号、二〇〇四年、八一〜九八頁

[http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/download/es\\_3\\_Sakamoto.pdf](http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/download/es_3_Sakamoto.pdf)

同「フルーストと自動車旅行の美学——スピード時代の芸術」から『ネットワーク』としての小説へ」、『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』第十四号、二〇〇五年、一七九〜一九二頁

南洋一郎（モリス・ルブラン原作）『怪盗紳士』、ポプラ文庫クラシック、二〇一〇年

山田登世子「メディアのアイドル《怪盗ルパン》」、『現代思想』メタ・

ミステリー特集、一九九五年二月、五一〜六二頁

同『リゾート世紀末』筑摩書房、一九九八年

ルブラン、モリス『怪盗紳士ルパン』平岡敦訳、ハヤカワ文庫、

二〇〇五年

同『奇岩城』平岡敦訳、ハヤカワ文庫、二〇〇六年

同『ルパン対ホームズ』堀口大樹訳、新潮文庫、一九六〇年

(立教大学文学部准教授)